

琉球大学学術リポジトリ

長期入院している子ども達と「ともに学び」「ともに楽しむ」ICT交流の実践：
児童の「向かう力」を引き出すICT機器を活用した前
籍校との交流及び共同学習

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター 公開日: 2018-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大城, 麻紀子, Oshiro, Makiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41168

長期入院している子ども達と「ともに学び」 「ともに楽しむ」ICT 交流の実践

—児童の「向かう力」を引き出す ICT 機器を
活用した前籍校との交流及び共同学習—

大城 麻紀子¹⁾

**Using ICT to enable children hospitalized for a long time to learn
and play together with their peers.**

**- Driving a motivation to move forward among students
in long-term hospital stay by remotely interacting
and co-learning with peers at their school -**

Makiko OSHIRO

長期入院している児童は、学習の遅れへの不安、前籍校の友達とのつながりが弱くなることへの不安など、長期入院後の前籍校への復帰への不安を抱えて過ごしている。こうした児童の不安を軽減し、児童が前籍校とのつながりを意識して、入院中も前籍校の児童とともに学ぶ機会をつくり、ともに楽しみながら自児童自身の前籍校へ、外界へと「向かう力」を高めるための学習指導の工夫を行う事が病院内訪問学級の教師に求められている。

さて、平成 29 年 3 月に公示された新学習指導要領には、ICT の活用が子供たちの学習への興味・関心を高め、分かりやすい授業や子供たちの主体的・協働的な学びを実現する上で有効であると記述されている。また、国立特別支援教育総合研究所の「デジタル教科書、教材及び ICT の活用に関する基礎調査」では、病院に入院している児童生徒の退院後の前籍校への復帰と適応を促す手段としては、Web を通して前籍校の教師や友だちと一緒に学習したり話したりできる ICT 交流が有効であると述べられている。

そこで、長期入院している児童が前籍校とつながり、学びの連続性を保障し、前籍校への復帰を促すための ICT 機器を活用した交流及び交流学習の有効性について、3 年間の実践を通して検証した。

After having been hospitalized for a long time, children tend to become anxious about going back to their normal lives. In particular, they're worried about being left behind compared to other students due to having missed too much of the curriculum.

To alleviate this anxiety, teachers who visit students in long-term hospital stay need to drive their motivation to move forward by maintaining the connection with their peers at school—enabling them to learn and play together.

The Government Curriculum Guidelines released in March 2017 proposed that using ICT devices in school lessons is an effective method of driving interest in learning, making

1) 沖縄県立鏡ヶ丘特別支援学校

it easier for students to understand lessons, and realizing independent and cooperative learning.

Additionally, a “baseline survey on utilizing digital textbook and learning tools and ICT devices” released by The National Institute of Special Education suggested that online conversations and co-learning with teachers and peer students at schools using ICT could help hospitalized children return to their schools.

This report will verify the effectiveness of using ICT devices to maintain connection between children in long-term hospital stay and their peer students at school, continue their school curriculums, and support them in their return, based on three years of actual practice in Okinawa.

はじめに

長期入院している児童は、学習の遅れへの不安、前籍校の友達とのつながりが弱くなることへの不安など、長期入院後の前籍校への復帰への不安を抱えて過ごしている。こうした児童の不安を軽減し、児童が前籍校とのつながりを意識して、入院中も前籍校の児童とともに学ぶ機会をつくり、ともに楽しみながら自児童自身の前籍校へ、外界へと「向かう力」を高めるための学習指導の工夫を行う事が病院内病院内訪問学級（以下、訪問学級と記す）の教師に求められている。

筆者は、訪問学級を担当していた時、大城（2017）¹が述べているように、長期入院している児童の心理的安定を図りながら、児童が「向かう力」を育み、病室から外界へ、そして前籍校へ復帰する意欲を高めるために、トータル支援の理念を活用した指導・支援を行ってきた。ICT機器を活用した交流及び共同学習（以下、ICT交流と記す）は、その指導・支援の一環である。

文部科学省は、平成29年3月に公示された新学習指導要領の特別支援学校学習指導要領等の改訂のポイントとして、障害の特性に応じた一人一人に応じた指導の充実の必要性を述べ、病弱教育においては、間接体験、疑似体験等を取り入れた指導方法の工夫を行う事を提唱している。

また関節体験、疑似体験を取り入れた指導の工夫の手段としてICT機器の活用について述べ、ICTの活用が子供たちの学習への興味・関心を高め、分かりやすい授業や子供たちの主体的・協働的な学びを実現する上で有効であるとしている。

さて、病院に入院している児童生徒の退院後の前籍校への復帰と適応を促す手段としては、「デジタル教科書、教材及びICTの活用に関する基礎調査」（国立特別支援教育総合研究所、2012）²の中で、Webを通して前籍校の教師や友だちと一緒に学習したり話したりできるICT交流が有

効であると述べられている。また、「病気の子どものガイドブック」（全国特別支援教育校長会、2012）³でもICT機器を活用して前籍校の授業に参加することで児童生徒が前籍校とつながっていることを実感し、安心感をもって授業に臨むことができるとしている。

筆者が実践を行った森川特別支援学校でのICT交流に関連する取り組みは、1997-98年度の「インターネット利用実践研究地域指定事業」、1998-99年度の「マルチメディアを活用した補充指導についての調査研究」でのICT交流の有効性の確認に始まり、2000年のEスクエア・プロジェクト「病院病院内訪問学級との共同学習環境の構築～交流学習、宿泊学習の取り組みを通して～」で本校と病院内訪問学級間交流で具体的交流を行うようになった。

その後もICT交流を続け、2006年度からは学校間交流を行うようになった。そして2007-2008年度に沖縄SNS（Social Network Service）委員会を立ち上げ、2009年度より前籍校とのICT交流を積極的に行うようになった。

これまでの実践事例からICT交流は、長期入院している児童生徒の心理支援および前籍校への復帰に有効であることがわかっている。

そこで今回、学習指導要領の改訂及び全面实施を見据え、これまでに筆者が実践したICT交流実践をまとめ、トータル支援の理念を活用した指導・支援の一環であるICT交流が長期入院の児童の心理的安定につながり、児童が前籍校復帰に対して主体的に向かおうとする力を引き出すことを検証する。

研究の方法

1 研究対象および実践期間

2011-2013年度の3年間に病院内訪問学級に在籍する筆者が担当した小学部児童10名

	学 年	交流回数	交流した教科等
A児	1年、2年	4	特活 生活 国語 算数
B児	2年	3	特活 生活 音楽
C児	5年	1	道徳
D児	5年	2	国語 社会
E児	3年	2	算数 英語
F児	3年	1	理科
G児	6年	1	算数
H児	5年	3	特活 総合
I児	3年	4	特活 国語 算数 始業式
J児	4年	1	図工
交流合計回数		22	

表 1 ICT 交流の状況

2 手続き

筆者が担当した小学部児童 10 名の合計 22 回の ICT 交流の実践についての記録、本人及び前籍校教諭からの聞き取り等に基づいて、本研究について保護者の了解を得られている事例を取り出して述べる。

ICT 交流とは

筆者が行った森川特別支援学校での ICT 交流の方法について、大城ら (2014)^{iv} がまとめた内容から抜粋して説明する。

(1) ICT 交流の目的

長期間に及ぶ入院により、病気や体調に対する不安に加え、前籍校と離れることで児童生徒には大きな肉体的・心理的負荷がかかっていると考えられる。しかし、感染対策等の医療的な配慮から、外出し友人と会うことは容易ではない。そこで、以下の 2 点をねらいとして、前籍校と交流及び共同学習を行うことにする。

- ①心理的安定を図り、ともに楽しむ交流ができる
- ②共同授業による共に学ぶことへ「向かう力」を引き出す

長期の入院により「クラスメイトに忘れられてしまっているのではないか」「クラスに自分の居

場所がなくなっているのではないか」等の不安を抱えていることが多い。また、「(治療によって変化した容姿を) 見られたくない・変な目で見られるのではないかと」いった前籍校への復帰に対する戸惑いをみせることがある。

瀬底ら (2017)^v は、子どもと教師との横並びの関係性がともに楽しむ場をつくり出し、子どもの主体的な「やり - とり」を引き出すと述べている。

場所が離れ、入院により関係性が薄くなっている前籍校の子ども達と入院中の子どもにとって、ICT 交流で、場をつなぎ、横並びの関係性を再構築させることは、瀬底ら (2017) の実践と同様に、離れている子ども達が場を共有し、ともに楽しみ、子ども同士の主体的な「やり - とり」を引き出すことが考えられる。

また、病院内訪問学級においては、必ずしも同学年の児童生徒と共に学習できるとは限らない。その上、教科書が異なる等の理由から集団で学習することが難しいことが多い。加えて自分が前籍校の学習進度に合わせて学習できているのか実感することが難しく、その不安が、前籍校への復帰を躊躇させることもある。そこで、前籍校の授業に参加し、ともに学ぶ機会を得ることで、子どもが自身の学習進度を意識し、ともに学び、ともに楽しみ、途切れない学習の機会の保障につながることを考えられる。

(2) ICT 交流の形態

- ①担任や友人との会話や特別活動
- ②教科授業
- ③屋外での学習等への参加型学習

(3) 実施までの手続き

児童生徒及び保護者、担当教諭が必要と感じた際に以下の流れで取り組む。

- ①前籍校担任と交流学習の内容について話し合う
- ②日程調整
- ③前籍校に依頼文を発送 (ICT 交流担当が行う)
- ④ICT 交流担当と共に前籍校の環境調査及び具体的授業内容について話し合う
- ⑤実施
- ⑥反省

研究の実践

(1) 入院後初めてのICT交流事例

① A児の1回目の事例【教科:特別活動】

a) A児の実態

A児は、小学部1年生の男子。病院での生活や治療に慣れ、状態が安定してきた入院から6か月目の時に1回目のICT交流をした。A児は、小学部入学の時からずっと訪問学級に在籍しているため、居住地の小学校にはまだ通ったことがない。年度内に居住地校に転学する予定があるため、居住地校に年度初めの段階でA児を受け入れる学級を決めてもらった。

b) ICT交流のようす

A児の1回目のICT交流は、登校時から1校時にかけて行った。

A児は、まだ1度も居住地校に通ったことがない。そのため、登校時から1校時が始まる前までの時間に iPodtouch で FaceTime を使って、環境設定および技術サポートで居住地校に行っていた森川特別支援学校の教師（以下M教師と記す）にA児の通学路や学校内を案内してもらい、その映像を見て居住地校の疑似学校探検をした。

A児は、初めて居住地校の教師や児童に会うことになったので、まず、A児が学級の雰囲気になれ、居住地校の教師や児童がA児の様子を知るために、お互いの自己紹介をした。はじめから学級全員の自己紹介をするとA児が画面を見る時間が長くなるので、1時間を5パートに分けて自己紹介を行った（表2）。

最後にお互いが歌や鍵盤ハーモニカの演奏を披露して1時間の学習を終えた。学習が終わった後、すぐにモニターを落とさず、居住地校の休み時間の間、フリートークの形でおしゃべりを楽しんだ。

時間	0分～5分	5分～20分	20分～25分	25分～38分	38分～45分
パート	導入	学級自己紹介①(3グループ14人)	A児の自己紹介	学級自己紹介②(3グループ13人)	歌と演奏
内容	・ICT交流の説明 ・先生の自己紹介	1人ずつ名前、趣味または特技を紹介してA児へのメッセージ	自分の名前、好きなこと、好きな遊びの紹介	1人ずつ名前、趣味または特技を紹介してA児へのメッセージ	・校歌と歌(学級) ・鍵盤ハーモニカの演奏(A児)

表2 A児の交流の流れ

c) 小考察

授業前の FaceTime での疑似学校探検では、M教師が自分の通学路を紹介するのを見て、「M先生、Aになったみただね。」と話したり、「階段、われているね。俺、歩けるかな?」と笑いながら言ったりしていた。また、図書室や保健室、校長室、事務室などを探検した時に、居住地校の司書や養護教諭、教頭が iPodtouch の画面を通してA児に話しかけたので、はじめは驚き、戸惑った様子で筆者を見上げて、「なんて返事すればいいの?」の困った様子を見せていた。「あいさつしたら?」と筆者が促すと、緊張して落ち着かない様子でなかなか言葉が出なかった。しかし、画面の向こうから、先生方が優しく笑顔で話しかけてきたので、A児は次第に落ち着きを取り戻し、てれながら返事を返していた。

初めて居住地校の様子を見て、訪問学級の担任に「ほかにはどんな教室があるのかな?」と聞いてきた。疑似学校探検の間中、興味深く iPodtouch の画面を見ていたので、自分の居住地校に対する興味がわいたように見えた(図1)。この授業前の疑似学校探検が功を奏して、A児は学校探検が終わる頃には、訪問学級で学習している時と同じように明るく物おじしない様子になっていた。

特別活動では、初めて居住地校の担任や児童に会うので、はじめ緊張した様子だった。居住地校の担任が自己紹介をした後、児童たちの自己紹介が始まった。児童一人一人が、自分の名前や趣味、特技、そしてA児への質問を書いた画用紙を持ってカメラの前に立って話していた。児童一人一人のA児へのメッセージに対して、A児が一言ずつ受け答えするのを聞いて、居住地校の児童はうれしそうだった。A児が何と答えるのかを楽しみにしながらメッセージを伝えていたと後日、居住地校の担任が話していた。

A児は、居住地校の児童が自分からの一言を嬉しそうに聞いているのを画面を通して見て、次第に笑みが多くなっていた。しかし、自分の自己紹介の番になるとまた緊張した表情になった。自己紹介と病院での様子をまとめたメモをもとに話し終わると、はあっと小さく息を吐いて胸をなでおろしていた(図2)。

お互いに一度も顔を合わせたことはないのだが、交流が終わった後のフリートークでは、「治療がんばってね。」「学校に来たら一緒にサ

ッカーやろうね。」など、たくさんの声かけがあった。また、M 教師は、「みんな A 児が自分たちのクラスの一員であることを自然に受け入れていたので、教室の中にすでに A 児の居場所があって、A 児がまだ一度も教室入ったことがないとは思えなかった。」と話していた。

1 回目の ICT 交流を特別活動にしたことで、居住地校の教師や児童、そして学校、教室の雰囲気があり、A 児が居住地校を身近に感じることができ、前籍校へと向かう力を高める事ができた。

この事例から、年度初めの入院や前年度からまたがっての入院で、居住地校や前籍校の担任や児童とまだ面識がない時の 1 回目の ICT 交流学习では、お互いの自己紹介を入れた活動をする方が望ましいことが分かった。そして、ICT 交流が離れていてもお互いを認め合い、ともに楽しむことができることも分かった。

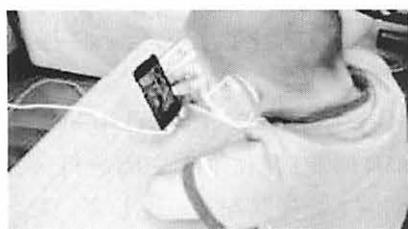


図 1 FaceTimeでの疑似学校探検



図 2 自己紹介と演奏

② B 児の事例【教科：生活】

a) B 児の実態

B 児は、4 月に転学してきた小学 2 年の男子で、病院の治療に慣れてきた 5 月中旬に、準クリーン室で iPad を使って 1 回目の交流を行った。交流する学級は、1 年生の時と同じ教師が担任をしていて、クラスの 3 分の 1 が 1 年生の時のクラスメイトだった。治療の影響で頭髪が抜けていたので、本人の希望で頭にバンダナを巻いて交流に臨んだ。

b) ICT 交流のようす

2 年になってはじめての交流だったので、A 児と同様に前半はクラスの雰囲気になれる事を目的に交流を行う事にした。前半に Skype を使って、教室でグループごとの自己紹介をした

り、B 児の自己紹介をしたりした。後半は、観察する野菜を教材園に植える様子を iPodtouch の画面を通して見ながら、「野菜を植えよう」の疑似体験をした。そして、クラスの友達と同じように、植えた後の野菜を観察日記に書いた。

c) 小考察

B 児は、初めは「なんて言えがいい?」「B は何をやるの?」と何度も学習内容を確認して不安な様子を見せていたが、1 年生の時と同じ担任だったことやクラスの雰囲気が 1 年の時とあまり変わらなかったこともあり、交流の途中からは緊張もなく自然に学習に参加していた。植物への接触が禁止されている病院内では、野菜の観察は、これまで教材ソフトや NHK のデジタル教材を活用して学習していた。しかし、直接自分とは関係のない教材に、低学年の児童の中には学習内容を自分に反映することが難しいこともあった。

この交流学习では、前籍校の教師の配慮で、教材園に B 児の野菜を用意してもらい、クラスの仲間が B 児の代わりに植えていたので、B 児は、「僕のミニトマト、どれくらいで大きくなるかな?」と、野菜の成長を楽しみにしている様子が見られた。また、植えたミニトマトは、保護者が 1 週間に一度、前籍校へ行って写真に収めて病院へ持ってきてくれた。B 児は、保護者が撮って来た写真をもとに、ミニトマトが実をつけるまで観察日記を書くことができた。

同じ内容の交流を 2 年生になった A 児も行った。二人の様子から、観察や見学に制限のある病院内では、ICT 交流を活用することで疑似体験学習を自分の体験学習として感じ、学習内容への興味関心が高まるとともに、前籍校での自分のミニトマトの成長を継続して観察できるので、離れていても途切れない学びの保障につながるということがわかった。



図 3 交流の様子



図4 前籍校にある植えて1か月後のB児のミニトマト

図4 成長したミニトマトとB児

(2) 年度途中での入院、または、2回目以降のICT交流事例

① C児の事例【道徳】

a) C児の実態

C児は小学部5年の女子。7月末に入院し、病院でのリハビリや院内学級にも慣れてきた。入院期間は当初3ヶ月であったが入院期間が2ヶ月延びている。退院日が延びているため、本人も早く前籍校に戻りたい様子である。入院して約4ヶ月目にICT交流を行った。ICT交流前のアンケートでは「顔も声も出して授業に参加したい」「先生や友達とおしゃべりしたい」と楽しみにしている様子であった。その反面「勉強が分かるか心配」という不安もみられた。

b) 交流の様子

交流は、前籍校の担任の希望で道徳「ボランティアをしてみよう」を行った。一週間前に前籍校の担任と打ち合わせを行い授業の流れを確認した。ワークシート等の準備物はなかったが、事前学習として国語の調べ学習で行っていたボランティアについて振り返り授業に臨んだ。

交流では、知っているボランティアについて話し合い、実際に自分がどのようなボランティアをしたことがあるかそれぞれ発表していった。その後、いくつかのチェックテストをしながらグループに分かれた。分かれたグループで話し合いをしながら自分たちにできるボランティアについて考えた。H児と一緒にあったグループは、カメラの近くに移動し、画面を通してグループで話し合いを行った。

道徳の授業が終わると、C児が音楽の授業で取り組んだキーボードを演奏した。また、前籍

校からは自然学習で行ったダンスを披露してくれた。その後は友人から病院や院内学級についての質問等を受け、フリートークを楽しんだ。

c) 小考察

授業前は緊張している様子であったが、画面に映る友人に手を振ったり友人からの声かけに「元気だよ」と答えたりしていた。グループの話し合いでは、少し緊張していたが、自分の意見を言ったり友達の意見を聞いてうなずいたりしていた。フリートークでは、積極的に話しかける様子ではないが、笑顔がたくさん見られた。ダンスのかけ声の中でC児の名前が入っているなどアレンジされていて嬉しそうな表情であった。

ICT交流後は「みんなと授業できて良かった」「みんないつもと変わらなくておもしろかった」「またICT交流してみたい」と満足そうな表情であった。

② D児の事例

a) D児の実態【教科:国語(ディベートの授業)】

D児は、小学5年の女子。7月中旬より入院。夏休み明けの9月にICT交流を行った。幼少期より何度も入退院を繰り返していた。交流を通して前籍校との学習の空白を少なくしたいと考えており、長期入院中の学習、ICT交流についても前向きであった。

b) ICT交流の様子

「討論会を開こう」の単元で、単元に入る時に前籍校の担任より討論会のテーマを聞いて、同じ内容で学習をすすめた。前籍校で班をふたつに分けて、対立する二つの意見でディベートをすると聞いていたので、B児も入れて班分けした。D児は、班の一員として意見を述べたり、相手の班に質問したりしていた。

c) 小考察

久しぶりに見る前籍校の学級や担任、友達に少し照れた様子で声も小さくなりがちであった。友達が「元気?」「治療がんばってる?」「いつ帰ってくる?」と声をかけるとうれしそうに笑って答えていた。友達や前籍校の担任の語りかけに次第に緊張もほぐれ、前籍校の学級にいるかのようにスムーズにディベートに参加していた。

同学年がほとんどいない病院内の学級では、ディベートのような集団で討論する機会が得にくい。こうした集団討論をICT交流を活用して前籍校と行うことで、病院内では体験しに

くい集団討論をすることができた。

(3) E 児の事例

a) E 児の実態【教科：英語】

E 児は、小学3年の男子。7月中旬より入院。9月に転学してきた。はじめは、ICT 交流に消極的で希望しなかったが、他の児童の交流の様子を見て自分もやりたいと言ってきた。そこで、11月に1回目の交流を本人の好きな算数で行い、1月に2回目の交流を行った。

b) ICT 交流のようす

E 児は、2回目の交流だったので、あまり緊張はしていなかった。また、好きな英語の学習だったので、画面の向こうのALTやクラスの仲間と一緒に楽しく話したりゲームをしたりしていた。

c) 小考察

これまでは、小学部は前籍校の担任の教科の時だけで ICT 交流を行っていたが、この事例ではじめて担任外の教科での交流ができた。C 児の前籍校は、学校全体で ICT 交流に理解が深く、また、U市の教育委員会も積極的に協力してくれたこともこの交流ができた要因の一つである。

E 児が行った2回の交流は、ICT 交流に消極的だった E 児が、入院により会えなくても、登校していた時と同じように前籍校とともに学び、ともに楽しむことが ICT 交流によってできることを経験させた。

(3) ICT 交流に消極的な児童の事例

① F 児の事例【教科：理科】

a) F 児の実態

F 児は、小学3年の女子。2年生の時の1月中旬より入院。2月に他の病院から転院してきた。内向的で自分からはなかなか話しかけることができない。新しい環境に慣れるのに時間がかかるので、F 児のペースで病院の生活や学級に慣れるよう配慮しながら学習をすすめた。

ICT 交流には消極的ではじめは希望しなかった。しかし、退院が近くなると前籍校の3年生の新しい自分のクラスのことを気になってきたようだった。学習中に「〇組の先生、みてみたい。」「2年の時の友だち、同じクラスにいるかな?」と話すようになった。そこで、もう一度 ICT 交流をすすめると、「自分が映らないならやる。」と言ってきた。E 児の要望にこたえて、前籍校の様子をみるだけの ICT 交流を3

年生になった5月に行った。

b) ICT 交流のようす

F 児は、見るだけの交流だったが、とても緊張している様子だった。だが、テレビに前籍校の様子が映ると、はにかむように笑みを浮かべた。学習中や学習後に前籍校の担任や友だちから声をかけられと困ったような顔をしたので、「向こうにはFさんの顔は見えないし、声も聞こえないよ。大丈夫だよ。」と言うとホッとしようだった。前籍校からは、F 児のようすを気づかうことばや明るくはなしかける場面が何度も見られたので、「先生がFさんのかわりに返事をしようか?」と聞くと「うん。」と言ったので、筆者がF 児のいいたいことをチャットで書いて前籍校に伝えた。声とチャットのやり取りではあったが、F 児は担任や友だちとのおしゃべりを楽しんでいった。

また、学習では、担任の配慮でF 児の苗が教材園に植えられていて、それをクラスの友だちが交代で育てていた。そのことを知らされたF 児はうれしそうにわらって、画面に向かって「ありがとう」と小さな声で言った。筆者はそれをチャットで前籍校に伝えた。こうしたやりとりからF 児の緊張は次第にほぐれていった。表情が和らいできたF 児の様子から、苗の観察日記を書いている途中で「書いている手もとを写して、みんなにF さんもみんなと同じように書いていることを見せたい」と話すと、「いいよ」と返事が返ってきたので、急きよ WEB カメラを用意してF 児の手元を写して前籍校に見せた。前籍校のテレビ画面にE 児の手元が映ると、「書いてる。上手だね。」「F も同じことやってる。」などの声が聞こえた。友だちの反応にE 児は笑い、筆者が「上手だって言ってたね。」と話すとはにかみながらうなずいた。

c) 小考察

交流に消極的な児童の場合は、無理にはすすめず、他の児童の交流の様子を話したり、前籍校と手紙や作品での交流をすすめたりしながら、本人が交流をしたいと思える環境作りをすることが大切である。

これまで ICT 交流を行った児童は全員、前籍校への興味や関心、そして前籍校への復帰への期待と不安をもっていた。F 児も他の児童と同じ様子が見られたので、E 児にあまりストレスのかからないように話題を選びながら、ICT 交流への興味関心を高めていった。こうした時間をかけた取り組みがF 児に ICT 交流を受け入

れさせたことが考えられる。

F児は、実際に交流を終えた後は、「やってよかった。先生もみんなもやさしそう。」とうれしそうに話していた。

F児の事例から、ICT交流に消極的な児童の場合は、児童の心理面の不安に寄りそいながら、少しずつ不安を取りのぞき、交流へと向かう力を育むことが大切であることがわかった。また、交流のやり方も児童の要望に合わせて行うことでICT交流をしてもいいという気持ちを生み出し、前籍校への復帰に対するストレスを軽減できた。

② G児の事例【教科:算数】

a) G児の実態

G児は、小学6年の女子。小学4年の2月に入院。4月より本校へ転学してきた。気管切開のため、はじめは声が出せなかったが、自分で独自に工夫して、入院して1年後にカニューレ装着のまま話せるようになった。

また、G児は、頭部を安定させるためにハローベストを装着しているが、その姿を他人に見せることを嫌がり、なかなか病室からは出ようとしなかった。G児は、ハローベストを装着していることを隠したがってはいたが、前籍校の様子や友だちのことは気になるようで、会話の中にしばしば、前籍校や友だちの話題を出していた。

G児に本人が気にしている前籍校とICT交流をすすめたところ、6年の1学期には「やりたくない」と言っていた。しかし、G児のADLがあがってきた2学期に同様の質問をすると、「相手の様子を見るだけなら。」と、ICT交流を了承した。そこで、12月に前籍校の様子をみるだけのICT交流を行うことにした。

b) ICT交流の様子

算数の授業にWEBを通して参加する形式で交流を行った。前籍校の普段の算数の授業の通りに学習をすすめた。はじめは、相手からの発信を受けるのみであったが、学習の途中で、本人の理解を得てノートを書いている手元だけ移した。

c) 小考察

学習の流れや本人の参加、ICT交流への意欲などは、ほとんどF児と同様であった。G児は、交流後、「緊張したけど楽しかった。みんなが自分を忘れないでいてくれたことがうれしかった。」と話し、6年の1学期までは半ばあ

きらめていた前籍校への復帰への意欲をのぞかせるようになっていた。

実践した児童の声

児童	・入学前に入院したため、登校したことがなかったが、登校をイメージすることができた。早く学校に行きたい。(A)
	・友人と会話することができてとても嬉しかった。(全員)
	・始めは髪が抜けていることが気になっていたが、交流学習をするうちに気にならなくなった。(A、B、C、F、H、I)
	・治療をがんばって、早く戻りたいと思った。(全員)
	・学習が遅れていないことを知ることができて、勉強にやる気が出た。(D、E、G、H、J)

実践事例の考察

筆者は、2011~13年度に訪問学級に在籍している児童の中で筆者が担当した11名全員に対して合計22回のICT交流を行った。

本研究の事例が示すように、入院中の児童が自身の抱えている不安やストレスを軽減させてICT交流に対して「向かう力」を高め実践できるようになるまでは、それが可能になる環境を整える必要がある。

筆者は、その環境づくりのために大城(2017)が述べるように、トータル支援の理念を活用した。トータル支援について浦崎ら(2008)^{vii}は、「他者とより良い関わりができる場を保障し、肯定的な自己意識を形成することを大きな目的としてきた。」と述べ、信頼できる他者との関係性が、児童に現状を受け入れる大事な要素となることを述べている。また、浦崎ら(2014)^{viii}は、「安心できる土壌で生まれてくる物事へと『向かう内側からの動き』を『向かう力』とよび、重要な他者との関係性を杖にした安心して過ごせる土壌と過ごせる力は『向かう力』を生み出すものとなると考えている。」として、児童の「向かう力」を引き出すためには、重要な他者の存在と安心して活動できる場、心から楽しく参加できる企画の重要性を述べている。

筆者は、その理念を活用し、訪問学級の教師、保護者や医療関係者、前籍校の教師と、多方面の関係者とユニットを作り、児童が安心して活動できる場や企画を用意して児童の「向かう力」を高める心理支援を行ってきた。そのためのツールの一つがICT交流である。

トータル支援の理念を活用した実践では、F児、G児のような消極的な事例を含めてもICT交流を頑なに拒否する児童はいなかった。また、消極的だった児童に関しても、行った後は「やってよかった」、「またやりたい」「楽しかった」と、

ICT 交流を通してともに学び、ともに楽しむ交流ができたことを喜ぶことばが聞かれた。

また実践した児童の声から、どの児童も交流後は、ICT 交流を肯定的にとらえ、前籍校への復帰することへのストレスを和らげたことがわかった。

以上の事から、訪問学級や前籍校の教師が、長期入院中の児童にとって信頼できる他者として関わり続け、病室から遠く離れた前籍校の教室が安心して学べる場として存在できるよう、教師同士で協働して環境を整えることにより、児童が病室の外へ、前籍校へと「向かう力」を育むことが考えられる。

長期入院している児童が前籍校とつながり、学びの連続性を保障し、前籍校への復帰を促すための ICT 交流は、児童の前籍校への復帰への不安を和らげ心理的安定を図るために有効である。そして、児童が「ともに学び」「ともに楽しむ」ICT 交流は、児童に主体的、対話的な深い学びを可能にすることも考えられる。

今後、長期入院している児童が、治療を行いながらも途切れる事のない学びを保障され、離れた場所にいる教師や友だちとの交流を気軽に行える ICT 交流ができる環境が整うことを期待したい。

付 記

本研究を進めるにあたって、ご協力頂きました各児童の家族、病院スタッフ、院内学級の同僚ならびに前籍校のみなさまに深謝いたします。皆様のご発展を心より祈念いたします。

引用文献

- i 大城麻紀子 (2017)、長期入院している児童の ADL を高め「向かう力」を育む指導・支援：トータル支援の理念をもとにした A 児への指導・支援実践から、琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要 (8) : 81-92
- ii 国立特別支援教育総合研究所 (2012)、デジタル教科書、教材及び ICT の活用に関する基礎調査
- iii 全国特別支援教育校長会 (2012)、病弱の子どものガイドブック
- iv 大城麻紀子、仲地誠、比嘉雅子、長濱星乃、仲村良哉 (2014)、沖縄県立森川特別支援学校研究紀要
- v 瀬底正栄、武田喜乃恵、浦崎武 (2017)、多様な子どもたちと「ともに楽しむ」授業と教育実践の新しい展開：活動企画「まちをつくって遊

ぼう」を通じた協働の授業づくり、琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要 (8) : 107-124

vi 浦崎武 (2008)、発達支援が必要な子どもたちへの他者との関係性に焦点を当てた集団支援企画「ツユコレ」、九州地区国立大学間連携教育系文系論文集、第 3 巻、第 1 号

vii 浦崎武；武田喜乃恵；瀬底正栄；崎濱朋子；金城明美；大城麻紀子；久志峰之；本間七瀬；運道恵理子 (2014)、自閉症スペクトラム障害児・者の他者への〈向かう力〉と〈受け止める力〉の相互作用—TSG を通じた〈能動—受動〉相互作用に関する支援教育論的検討—、琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要 (5) : 1-10